

英語と米語の差異覚え書

小林 絢子

1.0 英語と米語の違いについては、綴り字、発音、語法、表現法などの様々な観点から既にたくさんの研究ないしは対照表や例示がなされている。英語と米語の間には差がある、という先入観で、その差を強調する傾向を持つ人々と、英語を国際語として認識しようという意欲が強くてその差を無視しようという人々の両極端があることもよく知られている。その中で英語を研究する、特に英米語の差異を研究対象とする人は、ややもすれば差がある、ないしは差は大きい、という方に意思が傾きがちなのではないだろうか。(差がない、あるいは少ない、としたら研究するデータが少なくなるのだから、それは当然であろう。)しかし、英米語の差は英語あるいは米語の内部の方言差や書き言葉と口語の差、フォーマルかインフォーマルかという場面の差に加えて、「相手の言うことは判るけれど、私たちはそう言わない」というレベルで微妙なことも多い。山岸勝栄著「現代英米語の諸相」には A.H. マークワートと R.クワークの引用として、科学誌や批評誌など専門性の高い雑誌になればなるほど、英米語の統語上、語彙上の差異は減少する、との指摘がある。⁽¹⁾そこで今回は文章語と日常語が両方含まれた平易な児童書「ハリ・ポッターと賢者の石」を資料として、英米語の差異の一端を覚え書の形でまとめてみたい。

1.1 この本 (J.K. Rowling 著) は 1997 年にロンドンの Bloomsbury 社によって出版されるやいなや⁽²⁾たちまちベストセラー となり、宣伝によると、世界で現在 (2001 年 3 月) までに 3600 万部が売られたという。⁽³⁾ 日本語版

(松岡佑子訳)も1999年12月に出ており、その満1年後までに初版第125刷を発行している。⁽⁴⁾

この本は主人公の少年ハリーが魔法を使ったり、あるいは実力で次々と試練に挑戦、克服するいわゆる冒険小説であるが、筋の展開と細部の活写、整合性、ユーモアなどで大人も飽きさせない。又、英米の物語の伝統も逐一踏まえていて、魔法の到着は「メアリー・ポピンズ」を、仲間達と冒険の島に行く所は「ピーター・パン」を、ハリーに対するいじめは「小公女」や「ジェーン・エア」を、道中の試練は「オズの魔法使い」を、そして身体の伸縮や秘密の扉の存在は「不思議の国のアリス」を思い起こさせる。動物好きとか誘拐犯の活躍は「ドリトル先生」や「ピノキオ」さえ連想させる。そして、中心を流れるのはアーサー王伝説に出てくる聖杯探求にも比すべき「賢者の石」探求のテーマである。こう書いてくると、すべての冒険(ロマン)小説のごった煮とも思えるが、作者が最初に書いたのは7巻シリーズの最終章だった、というし、⁽⁵⁾ そのシリーズは2003年完成予定というから、その構成力は見事である。

そして本題の英米語の比較に入るわけであるが、この Rowling の本の米語版は1998年10月に Scholastic Press 社から出版された。⁽⁶⁾ 同じ内容の本を英語版と米語版に分けて出版する、ということに先ず興味をそそられたが、そのタイトルがまた私の関心をひいた。英語版は“Harry Potter (=H.P.) and the Philosopher's Stone”なのに米語版は“Harry Potter and the Sorcerer's Stone”と変えてあったからである。(ちなみにこの Harry Potter シリーズの他の既刊の巻についていえば、タイトルは英米同じである。)

2・0 英語を学ぶものは誰しもこの英米のタイトルの差に興味をもつだろうし、中味のほうも英米語の比較材料として、既に調査がされはじめているかもしれないが、このタイトルを先ず手がかりとして、本題に入ろう。そして順次単語、綴り字、語法、句読点等の各項目の比較を行う。

2.1 英米語の違いという lift と elevator, eggplant と aubergine をはじめとしてまず単語、語彙の相違が目立つ。この本のタイトルである philosopher's stone はなぜ sorcerer's stone と代えられているのであろうか。日本語訳の「賢者の石」は、研究社の「大英和辞典」(第5版初刷1980年、6刷1982年)に philosophers' stone (=philosopher's stone) の訳語としてでているので、Rowlings の本で使われる前からあった定訳といってよいであろう。sorcerer's stone についてはこういう辞書項目はこの辞書にはない。そして philosophers' stone は中世ラテン語の lapis philosophorum からきていて、「昔、錬金術師が求めて得なかつた霊石で、鉛などの卑金属を金銀に変える力があると考えられた」という説明がついている。philosophers' stone という辞書項目はアメリカ系の辞書にもあり、*The American Heritage Dictionary* には 1. In alchemy として a. The substance held to have the power of transmuting baser metals into gold; b. The elixir; c. The mystical substance serving as catalyst in the redemption of man and of the universe. とあり、⁽⁷⁾ Webster の *Collegiate Dictionary* (第10版)にも同様に an imaginary stone, substance, or chemical preparation believed to have the power of transmuting baser metals into gold and sought by alchemists と定義されている。⁽⁸⁾

それでは philosopher と sorcerer はどのように英米でとらえられているのであろうか。philosopher は勿論ギリシャ語 philo- 'love' (の連結形) と sophos 'wise, learned' の合成語で原義は 'a lover of wisdom' であるが、この語は英語文献では1325年頃初めて使われてから約50年後には alchemist, magician, diviner of dreams など魔術関係の人物を指す使い方を獲得している。⁽⁹⁾ しかしその語義は今は廃されて、*The Oxford English Dictionary* における引用例は1869年に書かれた、ローマ人の家庭にそのような philosopher が雇われていた、という記述が最後である。⁽¹⁰⁾ 上述のアメリカ系の辞書では、*The American Heritage Dictionary* の方には archaic として an alchemist という定義があるが、⁽¹¹⁾ Webster の方にはその定義は

ない。つまり philosopher に錬金術師としての意味を認めていないか、古い意味と限定しているのである。

故に philosophers' stone という表題にしたのではそのような熟語があるということを知っている人々には意味がわかって、philosopher と stone を別々に考える人々にとってはわかりにくいことになるのである。philosopher を sorcerer ('one who practices sorcery; a wizard')⁽¹²⁾ というように明白に魔術師を指すように代えてある米語版の方がわかりやすい表題を使っているといえる。

2.2 それでは 他の単語について、米語版は英語版よりわかりやすい語を使っているのだろうか。“H.P. and the Philosopher's Stone” と “H.P. and the Sorcerer's Stone” の第1章の語彙を比べてみよう。(以下、特に断りが無い限り同資料；ページ数は英語版のもの)

結論から言うと当然ながら米語版ではアメリカ人にわかりやすい単語に代えられている、といえる。しかしその数は多くはない。第1章ではハリーがダーズリー伯父さんと伯母さんの家で息子のダドレーと比べると可哀想な育ち方をすることが主に書かれているので日常語が多いのであるが、名詞は car park (英) と parking lot (米) に、sherbet lemon (英) を lemon drop (米) に、motorbike (英) を motor cycle (米)、dustbin (英) を trash can (米) にかえているだけである。又、俗語で「仲間」のことを英語では lot (p.11)、米語では crowd といっている。「一般の人々」のことは英語ではやはり lot (p.9) というが、米語では bunch としている。motorbike についてはただ bike という時は英米同語である。 (“I'll be takin' Sirius his bike back.” p.16)

形容詞の差異は「役に立つ」という意味のことを英語では useful といっているのに対し、米語では handy に直している位のものである。 (“Scars can come in useful. p.17)

一番目立つ変更はダーズリー夫妻の一粒種のダドレーが「イヤツ」と言う言

葉を覚えた、というぐだりで英語版では Shan't となっていたのを米語版では Won't と直したということであろう。それ以外は前述したように単語の変更は予想外に少なかった。bathroom (洗面所)、Underground (地下鉄)、cloak (マント)、robe (ローブ) などロンドン (その後は英国にある魔法の島) という舞台を尊重しているせいか、わかる限り現地の単語を生かしているといえよう。

2.3 次に少ない変更は綴り字である。neighbours (英) と neighbors (米) のようなよく知られた、語尾の -our, -or の他は realise (英) と realize (米) のような -s- と -z- の違い、grey (英) と gray (米) の違いを見出すだけである。

2.4 語法の変更は習慣的なものであるが、その数は多くない。例えば at half past eight (p.8) は米語版でもそのままにしてある。その数少ない変更を見てみると、「パン屋」は the baker's (英) が the bakery (米) となっている。the grocer's と the grocery と似たタイプの変更である。但し、次のような長文で the baker's のあとの opposite が米語版では省略されているのは語法の違いではないのではないだろうか。冗長さを廃した、と言えようか。

He (=Dursley) was in a very good mood until lunch-time, when he thought he'd stretch his legs and walk across the road to buy himself a bun from the baker's opposite. (p.9)

前置詞の towards は規則的に toward (米) になっている。on to (英) は onto (米) (Hagrid swung himself on to the motorbike. p.17). street の前置詞は文脈によるが、英語版では in、米語版では on となっている所がある。

Twelve times he (=Dumbledore) clicked the Put-Outer, until the only lights left in the whole street were two tiny pinpricks in the distance, which were the eyes of the cat watching him. (p.12)

ここでは「(光っている猫の目以外)、その通り全体が闇に沈んだ」、という雰囲気(英語版)が、in を on と変えることによって、やや機械的に「(光っている猫の目以外) その通りの街灯は皆消えた」、と変わってきているという気がする。しかし、米語へ変えた人はこの作品の雰囲気をこわさないようにしているので、これは the lights と要ったら in でなくて on the street と米語では決めているのかもしれない。同ページの he (=Dumbledore) had just arrived in a street の in は米語も in で、次ページの People are being downright careless, out on the streets in the broad daylight. では両語とも on を使っている。他に前置詞の使い方の違いとして set off home (p.10) (英) と set off for home (米) および (Young Sirius Black) lent it me (p.16) (英) と lent it to me (米) がある。

関係代名詞の使い方の差は英米間であまり見られないが、次の例では英語の which を米語では that に変えてある。

He (=Dumbledore) was wearing long robes, a purple cloak which swept the ground, and high-heeled, buckled boots. (p.12)

I have one (=a scar) above my left knee which is a perfect map of the London Underground. (p.17)

また、仮定法の中の be 動詞の扱い方に差が見られる。

It (=the Cat) was staring down Privet Drive as though it was (米語では were) waiting for something. (p.11)

しかし仮定の意味が強い時は英米両方共 were となっている。

His (=Dursley's) last, comforting thought before he fell asleep was that even if the Potters were involved, there was no reason for them to come near him and Mrs Dursley. (p.11)

次の例では英語の過去完了が米語では単純過去になっているが、これは文脈からいって、過去完了では多少不自然なので、米語訳者が直したのであろう。

He (=Dumbledore) had found what he was looking for in his inside pocket. (p.12)

2. 5 語法の違いは以上のようなものであったが、それでは米語版で一番多かった変更点はどこに見られるであろうか。句読点である。読者はこの本を読み始めてすぐにハリーの間界での保護者である Dursley 夫妻が常に Mr and Mrs Dursley と書かれていることに気づく。この呼称が米語版では常にピリオド付である。その他米語版で訂正されている点は：

- 1 文と文の切れ目の and の前にコンマを入れること。(米語版にあるコンマはカッコに入れて補充した。以下同様)

Mr Dursley hummed as he picked out his most boring tie for work(,) and Mrs Dursley gossiped away happily as she wrestled a screaming Dudley into his high chair. (pp.7-8)

接続詞は and でなくても同様である。

“No, sir -- house was almost destroyed(,) but I got him out all right before the Muggles started swarmin' around.”(p.16)

- 2 主語が同一でも動詞の羅列の場合最後の and の前にコンマを入れる。

He(=Dumbledore) dashed back across the road, hurried up to his office, snapped at his secretary not to disturb him, seized his telephone(,) and had almost finished dialling his home number when he changed his mind. (p.9)

- 3 形容詞の羅列の際はコンマを入れる。

a large(,) tawny owl (p.8)

a large(,) spotted handkerchief (p.17)

- 4 ハイフンの有無の違いがある。(左欄が英語；右欄が米語)

goodbye (p.8, p.17) good-bye

get-ups (p.8) get ups

passers-by (p.10) passers by

living-room (p.10, p.11) living room

- 5 コロン、ピリオドその他の違い。(米語版にあるものはカッコに入れた。)

She(=McGonagall) threw a sharp, sideways glance at Dumbledore

here, as though hoping he was going to tell her something, but he didn't, so she went on:(.) 'A fine thing it would be ...' (p.3)

There was no point in worryng Mrs Dursley, (,) she always got so upset at any mention of her sister. (p.9)

文中の疑問文のあとに米語版では疑問符を用いている。

Was this normal cat behaviour,(?) Mr Dursley wondered. (p.10)

- 6 引用符については 英語版の single quotation marks を米語版では規則的に double に直してある。

3.0 2.1と2.2で単語の相異を調べたが、その数は多くなかった。この本を楽しい読み物にしている特徴的な単語群として、子供の好きな品物が挙げられるので、その点に焦点を当ててみたい。

3.1 第5章「ダイアゴン横町」にハリーの学用品を揃える場面がある。そこに沢山の学校用品、日用品、魔術用品などの名前が登場する。

quills(羽根ペン)、parchment(羊皮紙)、globes of the moon(月球儀)、scale(秤)、potion bottles(薬ビン)等が英米同じであることは予想されることであるし、売られている珍しい動物や鳥の名前も同一である。

ただし教科書のことは英語版では Set Books(p.52)となっている所を米語版ではCourse Booksと変えてある。cinemas(映画館)は同じであるが、hamburger barsはhamburger restaurantsに変わっている。また店の名の表記が2.2で見たようにapostrophyの有無の差がある。the apothecary's(英)はthe Apothecaryとなっている。その他店の看板の表記が米語版では斜字体にしてあったり、本の題名が斜字体(英語版では著者名の方が斜字体)だったりして、多少の違いがある。

3.2 食料品については、Roald Dahlの*Boy*に出てくるtuck-boxの中味のような子供の嗜好品がたくさん登場する。ホグワースの魔法学校に行く列

車の車内販売のおばさんが売っているものである。それらを英語版は：

It was a nice feeling, sitting there with Ron, eating their way through all Harry's pasties and cakes (the sandwiches lay forgotten). (p.76)

としているが、下線の部分を米語版では Harry's pasties, cakes, and candies と補足説明的に補っている。これは数少ない付加の例の一つであるが、次に甘味料の羅列がはじまるので、candies をつけ加えた方が親切であると言う配慮による変更であろう。sweets (p.10) の時は米語版はそれを candies に直さずにそのまま用いたが、やはり candies を使った方が各種の「あめ」を登場させるに際してはわかりやすいのだから。gum (風船ガム)、licorice wands (杖型甘草アメ)、pumpkin pasties (かぼちゃパイ)、等お菓子の中の個々の名は英米同じである。ただし「鼻くそ味」と訳してある bogey-flavoured (jelly) beans (p.78) は米語版では booger-flavored となっている。車内販売のおばさんの押す台車も英語版では trolley (p.76) であるが米語版では cart としてある。

4.0 このように見てくると同書では英語版と米語版に大きな差があるようであるが、はじめに述べたように全体の印象としては訂正は少ない。調査する前はタイトルも変えているし、わざわざ両語版を分けて印刷している位だから、習慣的な言葉や言い回しは全て変えてあるのかと予測していた。例えば half-past eight は eight thirty に、biscuits は cookies になっているかと思っていたが、そうではなかった。原文の持つ雰囲気や尊重し、形容詞や副詞などの修飾語もほとんど変えていない。この本は前述したように世界的なベストセラーなので、今後翻訳の地域差の比較研究も出てくるかもしれないし、もうすでに一部なされているかもしれない。ただし米語版に関する限り、米語版に直した文責のある人物の名前も明記されていないので、編集者あるいは出版関係者が、米国の子供達に読みやすいようにするために必要最小限の変更を加えるにとどめたのだろう、ということがいえる。

注

- 1 山岸勝栄著「現代英米語の諸相」こびあん書房 平成元年 東京、p.19。
- 2 J.K. Rowling, *Harry Potter and the Philosopher's Stone*, Bloomsbury Publishing Co. 1997.
- 3 J.K.ローリング著、松岡佑子訳「ハリー・ポッターと賢者の石」の帯状広告、静山社、2000年。
- 4 同上。
- 5 同上 p.460.
- 6 J.K. Rowling, *Harry Potter and the Sorcerer's Stone*, Scholastic Press, New York, 1998.
- 7 William Morris ed., *The American Heritage Dictionary of the English Language*, American Heritage Dictionary Pub. Co. Inc. and Houghton Mifflin Co., 1969 s.v. philosophers' stone.
- 8 Mish, Frederick C., Chief ed., *Merriam-Webster's Collegiate Dictionary*(10th ed.) Merriam-Webster Inc., Springfield, Massachusetts, 1993, s.v. philosophers' stone.
- 9 Murray, A.H., et al, *The Oxford English Dictionary*, Clarendon, Oxford, 1888-1933, s.v. philosopher.
- 10 *The Oxford English Dictionary*, s.v. philosopher 2.
- 11 William Morris, s.v. philosopher 1, 2.
- 12 これについては *The Oxford English Dictionary* も *The American Heritage Dictionary* も *Merriam-Webster's Collegiate Dictionary* もほぼ同じ定義をしている。